

梵語の名詞は、よりく用いらせし見え、此物語中にも **びんづる** **うとんげ** 等の語あるを見る。又 **變化** **功德** 等佛敎に用ひらるる吳音の詞も頗る交れり。猶ほ漢語れ交りしことは「竹取物語」と支那文學」の條に述べたとて。

音便の言葉は、此物語中にあるもののみにて、いと多き。今其一二を擧げんか。

久しくを 久しう。 仕へまづらむを 仕うまつらむ。 まゐで(參出)を まうで。

かかぶり を かうぶり。 つき地 を ついち。 垣間見 を かいまみ。 等

あま。羅頭音、濁頭音の如き、古代未開の民が、未だ其口唇より發すること能はざりしならむも、已に竹取物語の中には、

るり(瑠璃) だいなごん(大納言) びんづる(賓頭廬) だいがん(大願)

等あるを見れば、發音もなうく自由にて、國語もいたく進みたりしを明にすべし。

又拗音を單音とせる例は

唱歌 を そうか。 仮粧 を けろう。 紙燭 を えろく。

等ありされと拗音のまゝ用いたるも見ゆまば、全く行はせざりしにはあらざりしならむ。此等の研究は、いと面白きものならんも、我が見出でつるものは此よ過ぎず。淺學は終に如何ともし難きなり。

(未完)

## 主 我的 氣 象

一名元氣論

朝 山 景 秀

漢土二千載以前に生きたる稀世の豪傑仲尼の門下に一の剛骨漢あり其名を曾參と云ふ彼嘗て大勇を

談えて曰く自反而縮雖千萬人我行矣と其嚴然たる山岳の雲表に聳ゆるが如く其凜乎たる氷霜の冒す可らざるが如きの大氣象は一語を反覆玩味するときは千載以下人をして其風采を想見せしむるに足れり而えて矣の一字何等の決斷下し得て萬鈞なるを覺ふ

吾人人類が社會の表面に立ち一個獨立の人物となり榮譽の最後を終んど欲せば須らく曾參的の修養  
悟覺を要すべし造次頃刻も忘却すべからざるの要件たり而して這般の修養悟覺なる者果して至易か  
至難か滔々たる凡庸皆な是など其類を出て其萃を抜き薪焉として千萬人の標的たるものは東西古今  
僅々屈指に過す然れども人々自から天賦の良心あり此良心實に千の教師萬の書籍にも過ぎたる貴重  
の寶玉自己の私有之を用ひて盡きるとなし一舉一動苟とに此良心の向ふ所に従はゞ道を離るゝおと  
無るべし仁遠乎哉吾欲仁斯仁至矣決して至艱とするに足らざるなり良心の勢千丈の堤を截斷するが  
如し一瀉千里沛然として防ぐべからざるあり

苟も我良心以外に助けを求め他に委頼するが如き念慮あるときは已を既に他人の配下に降參たる  
なり他人の足下に跪伏したるなり既に一個獨立の人物と云ふべからず然り而して已れ既に此位置に  
あらんや他人は之を愛し之を保護し之を憫むべきや否々大に然らざるなり却て將に其卑屈怯懦な  
るを惡み之を輕蔑し之を嘲侮し彈指して之と齒するを耻ぢ萬人皆之を顧まざらんと最終に孤立無援  
の域に沈淪し悲哀號泣之を天地に訴ふるも既に已に遅し矣或は曰く人自倦而後人侮之或は曰く美と  
自ら助くるの人を助くと或は曰く心だに誠の道にかなひをば祈らずとも神や守らんと洋の東西を  
論せず活眼家の識見意匠何ぞ然く相合するの甚しきや

已を恃まらずして他を恃み已に求めずして他に求め自ら重んぜずして他に重せられんことを望む是を

緣木求魚惡濕居卑的の痴呆漢のみ世人皆自由を言ふ果して自由の眞意を知るや自由也者は決して我儘勝手の謂にわらず所謂我良心の靈知を以て照し得たる天理の本分人類の當務なり我身を立て法律を破らず秩序を紊さず交際を妨げず俯仰して天地に愧ぢず自反して心に疾しからず富貴も淫する能はず貧賤も移す能はず威武も屈する能はざるものなり卒然として之に遇へば王公も其貴を失ひ貴育も其勇を失ひ良平も其智を失ひ晋楚も其富を失ふ仲尼が矩を踰へすと曰ひ孟軻が浩然の氣を養ふと曰ふ者亦た是れ自由に外ならず而して此自由なるものは已れの欲する儘如何に之を伸張するも不可あること無く且つ必しも形體と連帶すべきものに非らず故に比干は胸を割かれ夷齊は餓死まソクラテスは毒を飲みカリレオは幽せられ顔常山之舌を裂かれ文々山は土窟に閉せらるる其形体は横壓強迫の極に陥いるとあるも精神の自由は伸びて天地の間に塞ぢ千歳の下凜然として生氣あるもの豈に他あらん哉ユマルソン曰く我が心性の外に神聖なる法則はあらずと嗚呼主我的氣象なる哉主我的氣象なる哉此を全ふする人物之を稱して獨立不羈の眞男兒と云ふ釋迦は云はすや天上天下唯我獨尊と吾人は以上に於て個人の心得を述べより請ふ歩を進めて之を論せん此主我的氣象なるもの當に吾人一個の人間として須臾も忘却す可らざるものなるのみならず吾人が相集合して國家を形くるの團體に於ても更に此悟覺わらざる可らず只是國民主我的の氣象をそ望ましけれ詳言すれば國家が互に相對峙して永遠に其獨立を維持する所以のものは其國民各個の腦底より燃へ出づる活火沸き出る源泉即ち一言以て之を蔽ば元氣にあり元氣即ち主我的氣象

斯く論じ來らば之を難するものあらん汝の論據は古昔時代陳腐の迂說漢學者の糟粕にして十九世紀文明の今日武力富力の時勢に適せざるものなりと嗚呼善哉言や今日の世界之實に文明なり實に武力

富力の競争場なり之を知るは吾人恐くは論者の後にあらざるを信ず國家の獨立を圖らんに兵備固より必要なり財富固より必要なり必要なればこゝろ兵隊軍艦大砲彈藥を増加し殖民開拓商業貿易も獎勵するなれ然れども武力以外富力以外に一個無形の原動力たるものあるを知らざるは一を知て二を知らず末を見て本を察せざるの癡論淺見たるを笑はざるを得ざるなり請ふ試みに之を論せん

目あるもれにして歴史を繙くものは必ず之を見たるなるべし若し夫を武力整備し而も毀富充實而も文學技藝燦然として進歩發達したるを以て直に邦國隆盛の原因となさば古代羅馬希臘は何を以て起り何を以て滅びたりしや彼波斯カーセーラの如きは何故に打滅されしやカーセーラは嘗て地中海の商權を掌握し其兵力富力羅馬當時の情勢に比すれば遙に幾層の上にありし然れども羅馬の爲めに敗滅したる其原因は一に彼國社會は道義地を掃ひ緊要な地位を占むるの輩は私利是れ謀り私慾是れ貪り以て國家の大計を忘却したるに由らずんばあらず波斯は數世の餘威を振ひ百萬の大軍を興し鞭を投じてヘレスポントを渡るに當てやザーキセスの眼中豈に希臘あらんや圖らざるは彼大軍は僅々たる小敵の爲めに敗られたる是を國を愛し君に忠するの元氣に乏しく奢侈柔弱に慣を來りたる東洋國民が希臘國民愛國の熱血に敗北したるなり彼北狄蠻人は如何之を羅馬帝國兵備豊富に比すれば實に雲泥の差あるべし而して帝國之遂に彼の爲めに滅びたり彼マヘドン王國は如何實に北方の野蠻叢爾たる一小新興國に過ぎず以て之を彼文物典章燦然たる希臘各州に比すれば其優劣果して如何なりしや然れども希臘諸州は遂に彼フネリッパ堅子の爲めに征服せしめられたりヌミヂヤ國王ジュニカルサー曰く羅馬は賣買品なりとフネリッパ曰く予は鐵を以てするよりと寧ろ銀を以て勝りと以て羅希の腐敗を見るに足れり之を要するに希臘も羅馬も波斯もカーセーラも此等國民の活動原機たる炎々烈々

の元氣あるに興起し之を失ふに滅亡せしなり治亂興亡の迹堂に深く鑑みざるべらんや  
富力武力固より國家の盛衰に大關係あるもの然れども特に注意すべきは一國の元氣なり若し國民に  
して主我的氣象に乏しく上下外を尊ひ内を卑し道德日に腐敗して輕薄佞柔の風俗増長し華美是れ競  
ひ利慾是れ争ひ清淨誠意の人は世を憤ふりて出でず要路の有司は難を避りて安に就き國家を度外に  
置きて姑息一日を貪るに至ては危機一發土崩瓦解四分八裂亦た收拾す可うらざるなり茲に人あり齒  
牙の美を誇らんが爲め自己本來の齒牙を抜き去り之に代ゆるに黄金を以て入齒を以するものあらん或は  
寶玉の眼鏡を飾らんが爲め自己固有の瞳子を傷ふものあらんとせし誰れか其愚に驚かざるものあら  
んや之を一國の元氣を度外視して只管其富を欲し只管武備を事とせんと欲するものに比すれば格別  
の差なきを覺ふ何となれば一國の元氣ありて始めて其富を利用し増加し以て確實安固なるを得べく  
始めて兵馬軍艦を活用運轉するを得可きなり然らずんば其富なるものは徒に奢侈贅澤の費用を供  
せらるのみ其武なるものは徒に一個の玩弄物一個の裝飾品と爲らんのみ本來の齒牙にして始めて  
能く咀嚼するを得べく活氣ある固有の瞳子にして眼鏡も入用なるべし若し若者あらんか如何なる水  
晶美玉の眼鏡も何の益か之れ有らんや元氣なきの國民には其富力武力は則ち糧を敵に輸らす耳正  
適き自滅自亡の媒介たるに過ぎざる耳

希臘諸國の迹前述の如し然り而して今日彼瑞西の如きは如何彼獨立なるものは決して平身低頭的の  
ものにあらず其大國強邦の間に屹立し不羈の國權を確立する所の一大基礎たるものは唯是一個炎々  
烈々たる國民の主我的氣象の上にあるなり蓋し富力武力なるものは國各其定限ありて存す故に大小  
の國自から差異なかる可らざるは論を待たず故に兵士の多少砲艦の多寡を以て一國の強弱を比較せ

ば各國年々の統計表面に於て勝敗の數昭々として明白なり然れども國民の元氣なるものは一個無形物なり其大小多寡固より計式的算數を以て遽に判斷すべきにあらざる而して此元氣の多少に依りては小國必しも大國を畏るゝに足らず大國必しも小國を侮ると能はざるなり所謂杆を爲て秦楚の堅甲利兵を打たまむべきなり見よ彼北米共共和國を彼建國 因を考一考せよ今古の歴史は不幸にして白面生の論を証して餘あらずと謂ふ可し

古人曰く三軍帥可奪匹夫志不可奪と況んや我同胞四千万の人士が元氣炎々烈火の如く同心協力義勇國を盡し死して悔ゆるなきに至らば我大日本帝國は宛も東海の表に屹出する富岳の如くならん元氣一さび振はゞ區々たる臨機の策略の如き刀を迎へて解けん耳嗚呼主我的氣象なる哉主我的氣象なる哉個人獨立の理亦た是れ國家獨立の大義なる哉

## 雜 錄

### 佐久間象山

杉山富樫

佐久間修理は信州松代に生れ象山と號す、當時國歩艱難を極め、人心動搖えて靜止せず、幕府之を制御鎮壓するに困む、象山慨然とまて爲す所あらんと欲す、擯でられて江戸に遊學し、刻苦粹勵、和漢の群籍を涉獵し、泰西の軍學を討究せ、大に造詣する所あり、爾後二十餘年の間、或は入て藩主の顧問となり、或は出で、天下を跋渉し、以て海防の籌策を建て、天下の形勢を察し、國民の士氣を振ひ、終始一の如く開港を主張し、艱難交々迫りて志氣益々堅く、百折千挫而も毅然たり、然りと雖も英傑偉人多くは當世に容れられず、悲ひ哉象山も亦た天寵を荷ふて其志を伸ぶる能はず、不世出の伎倆を抱き